

「教父」における詩篇 32 篇 6 節 (LXX) 引用の用法

—三位一体論の形成史に沿って—

高橋 博厚

導入

キリスト教の教義史において「教父」⁽¹⁾ たちが活動した古代は、ニカイア・コンスタンティノーブル信条 (381 年) やカルケドン信条 (451 年) が制定されたように、教義を形成・確立した時代だと言える。古代のキリスト教徒たちは、自身の論敵である異端やユダヤ人たちとの論争を通じて、“正しい教え”を確かなものとしていった。そして「その結晶こそがニカイアの三位一体であり」⁽²⁾、またペリカンも「初代教会の教理発展の頂点は三位一体の教義であった」⁽³⁾ と断言したとおりである。このように、三位一体の教義は「教父」たちの最大の功績であったと評価することができる。

古代教会において三一論を初めて本格的に議論した著作は、213 年頃にテルトゥリアヌスによって書かれた『ブラクセアス反駁 (*Adversus Praxean*)』であるとされている。だが、彼の三一論は父・子・聖霊の各位格の間に従属があるなど不完全なものであり、三一論の完成は 5 世紀のアウグスティヌスまで時代を下らなければならない⁽⁴⁾。つまり、三位一体の教義の形成には発展の過程があり、それは教会史に現れる異端者たちが多様なものであったことを示しているだろう。

三一論の成立へと至る論争は、その論駁相手が異端やユダヤ人であったことから、双方とも権威を認めていた旧約聖書を用いて行われた。そして「教父」たちは自身の信仰の正しさを証明するために旧約聖書の中から多くの立証テキスト (proof-text) を探し出した。三位一体に関する立証テキストとなったのは、「どんな創造物より前に生まれた、愛されたる神の子」⁽⁵⁾ として「知恵 (Σόφια)」を描いた箴言 8 章 22 節以下や、「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」と神が自身を複数形で呼んで

(1) 本稿では、「教父」はオリゲネスなどの異端として正統教会から排斥されたものを含んでおり、正統教義を形成したという厳密な意味での教父ではなく、古代のキリスト教著作家全般を指している。

(2) M. Simon, *Verus Israel: A Study in the Relations between Christians and Jews in the Roman Empire (135-425)*, trans. by H. McKeating. (Oxford; Oxford University, 1986), p.160.

(3) J. ペリカン『キリスト教の伝統—教理発展の歴史—』鈴木浩訳 (教文館、2006 年) 第 1 巻 240 頁。

(4) 土岐正策「テルトゥリアヌス〈ブラクセアス反論〉解説」『ブラクセアス反論・パッセリウムについて—テルトゥリアヌス 1—』(キリスト教教父著作集、教文館、1987 年、125-138 頁) 136 頁参照。

(5) M. Hengel, *Der Sohn Gottes: Die Entstehung der Christologie und die jüdisch-hellenistische Religionsgeschichte* (Tübingen; J.C.B.Mohr, 1975) S.78.

いる創世記 1 章 26 節、アブラハムの前にマムレの櫛の木の下で顕現した主が 3 人であったことを示す創世記 18 章 1 節以下などである。これらの立証テキストは、最初期の護教家であるユスティノスにおいて早くも見つけられる⁽⁶⁾。したがって、伝統的にこれらの立証テキストが古代教会で普及していたのは明らかだろう。

ただし、三位一体の教義の完成に至るまで伝統的に用いられた立証テキストは、「教父」たちの解釈の面においても変わらない伝承が必ずしもなされていたわけではない。むしろ、聖書箇所によっては「教父」たちによる解釈の歴史は、教義形成の発展史と著しい並行が見いだせることもあるのだろう。

そのような解釈の推移は先述した立証テキストにおいても見出せるだろうが⁽⁷⁾、本稿ではそれを最も顕著に示すであろう立証テキストである詩篇 32 篇 6 節 (LXX)⁽⁸⁾ (以下詩 32:6) を扱っていきたい。「主の言葉によって天は造られ、主の口の息吹によって天のあらゆる力は造られた」(τῷ λόγῳ τοῦ κυρίου οἱ οὐρανοὶ ἐστερεώθησαν καὶ τῷ πνεύματι τοῦ στόματος αὐτοῦ πᾶσα ἡ δύναμις αὐτῶν) という当該聖書箇所は、三位一体の神の第二位格「言葉=ロゴス (Λόγος)」と第三位格「息吹=霊 (Πνεῦμα)」の双位格が神の創造に参与していたことを示す箇所である。つまり、詩 32:6 は三位一体の正しさを一箇所の聖書引用のみで証明できる「教父」たちに“都合の良い”聖書箇所だったのである。これはニュッサのグレゴリオスが三位一体に反対するユダヤ人を反駁するには詩 32:6 を引用するだけで十分だとすることに例示される⁽⁹⁾。また、神の第二位格と第三位格の双方を示す他の立証テキストとして、「主の言葉を遣せば、それらを溶かす。主の息吹を吹きかけるのなら、水を流す」⁽¹⁰⁾ という詩篇 147 篇 7 節 (LXX)⁽¹¹⁾ が浮かぶが、詩 32:6 と比べると引用例も少なく、立証テキストとして用いられるのも 4 世紀になってからと比較的後代である⁽¹²⁾。以上のことから詩 32:6 の用例を確認する方がよいだろう。

本稿は、詩 32:6 が「教父」たちにどのような引用の仕方をされているのかを概観していき、そこから浮かび上がる三位一体の教義の確立へと至る論争の過程を検証することを目的とする。

(6) Iustinus. *Dial.* 56, 61-62.

(7) 例えば、創 18:1 以下については、L. Thunberg, “Early Christian Interpretation of the Three Angels in Gen. 18,” *Studia Patristica* 7 (1966, pp.560-570) を参照せよ。

(8) マソラ本文から翻訳した新共同訳聖書などでは 33 篇 6 節にあたる。

(9) Gregorius Nyssenus. *Or.catech.* 4.1-2.

(10) ἀποστελεῖ τὸν λόγον αὐτοῦ καὶ τήξει αὐτά· πνεύσει τὸ πνεῦμα αὐτοῦ, καὶ ῥυήσεται ὕδατα.

(11) 新共同訳聖書では 147 篇 18 節にあたる。

(12) Athanasius. *Ep.Serap.* 1.31, Epiphanius. *Pan.* 65.5.

1. 詩篇 32 篇 6 節が引用される時代と文献

古代・中世のギリシア語文献のデータベース Thesaurus Linguae Graecae (UC Irvine, 1972-) (以下 TLG) を用いると詩 32:6 の引用回数は時代を 8 世紀までに限定しても 126 回に及んだ⁽¹³⁾。しかも、この立証テキストを暗示している箇所があると思われるので、より多く数えることも可能だろう。さらに、教父による聖書引用箇所のインデックス *Biblia Patristica: index des citations et allusions bibliques dans la littérature patristique* (Paris; Editions du Centre National de la Recherche Scientifique, 1975-) を用いると、TLG にはないラテン教父やギリシア語原文が残存していない著作による引用をさらに 48 回数えることができた。TLG と *Biblia Patristica* の合計で 174 回の引用例を確認できた。これらの引用箇所について詳述することは紙幅の都合から割愛するが、引用している著者や文献について明らかになることを 3 点指摘しておく。

まず、新約聖書や使徒教父文書など 1 世紀から 2 世紀前半までの著作には、詩 32:6 は一度も引用されていないということである。最古の引用箇所は、暗示している箇所を除けば⁽¹⁴⁾、180 年以降にアンティオキアのテオフィロスによって書かれた『アウトリュコスに宛てて (*Ad Autolyicum libri tres*)』である。つまり、2 世紀の末まで詩 32:6 は、立証テキストとしてほとんど用いられていなかったと言えよう。

第二に、最も引用回数が多かった時期は 4 世紀であり、5 世紀以降はその数を減らしている⁽¹⁵⁾。また、2 世紀や 3 世紀はあまり頻繁に引用されていない⁽¹⁶⁾。これらのことは、残っている文書の数にもよるので一概には言えないが、三一論論争が最も盛んだった時代である 4 世紀に最も引用回数が多いことは興味深い。そして、アタナシオスや「彼にアレクサンドリアの教理学校校長に任じられた」⁽¹⁷⁾ ディデュモス、カイサリアのバシレイオス、アンブロシウスなど正統教義の確立のために貢献した「教

(13) 検索方法は以下のとおりである。まず τῷ λόγῳ τοῦ κυρίου οἱ οὐρανοὶ ἐστερεώθησαν καὶ τῷ πνεύματι τοῦ στόματος αὐτοῦ πᾶσα ἡ δύναμις αὐτῶν という全文で検索をかけ、その後 τῷ λόγῳ τοῦ κυρίου * οἱ οὐρανοὶ ἐστερεώθησαν * τῷ πνεύματι τοῦ στόματος αὐτοῦ * πᾶσα ἡ δύναμις αὐτῶν と文を区切りながら、また特徴的な単語である ἐστερεώθησαν (στερεώω「造る」または「固める」の受動態・アオリスト・3 人称単数形) も同様に検索した。そして検索結果から重複箇所を省いた。

(14) 暗示している箇所を含めれば新約聖書外典で 160 年頃に書かれたとされる『使徒たちの手紙 (*Epistula apostolorum*)』の 3 節、またはユスティノスが最古だろう。ユスティノスは、神が万物の創造に先立って神自身が生み出した一つの理性的な力が、主の栄光、知恵、御使いなどと呼ばれていることを述べ、「言葉 (*Λόγος*)」(詩 32:6) もその中の一つに含んでいる (*Dial.*61)。

(15) TLG による検索結果では 4 世紀が 80 回で最も多く、続いて 5 世紀が 26 回、6 世紀から 8 世紀は合わせても 14 回となった。

(16) 2 世紀はアンティオキアのテオフィロス、アレクサンドリアのクレメンズ、アレクサンドリアのセネオレスが各 1 回、エイレナイオスが 5 回で計 8 回、3 世紀はオリゲネス 7 回 (偽書も含めて 10 回)、テルトゥリアヌス 4 回、ヒッポリュトス、キュプリアヌス、ポエトヴィオのヴィクトリヌス、ブルキアヌス写本で各 1 回の引用で計 18 回である。

(17) Rufinus. *H.e.*2.7.

父」による引用の頻度が目立つ⁽¹⁸⁾。彼らに共通するのは、 Pneumatomaconi⁽¹⁹⁾ やマケドニオス派などと呼ばれる聖霊の神性を否定する立場の論駁に努めていたことである。となると、詩 32:6 は三一論の中でもとりわけ聖霊の神性を主張するための立証テキストとして重宝されていた可能性が高い。

第三に、詩 32:6 を引用した著作のジャンルが、注解書（詩篇注解）か異端反駁文書に分類できるものが多かった。引用回数が注解書に多く数えられるのは、注解するために必ず当該聖書箇所を引用するのだから当然である。他方、異端反駁文書では、“正しい”神論を異端者たちに証明するために「教父」たちが継続的にこの聖書箇所を引用していたと考えて問題ないだろう。ここで注目すべきは、それぞれの著作の表題を確認するだけでも反駁する相手が多岐にわたっているという点である。例えば、ヒッポリュトスはノエトスという様態論者（Sabellianism）を、カイサリアのエウセビオスはアレイオス派に近い立場から様態論に近いアンキュラのマルケロスを反駁相手としているが、アタナシオスはアレイオス派を反駁相手としている。さらに、バシレイオスは急進的アレイオス主義者のエウノミオスを、偽アタナシオスはマケドニオス派を⁽²⁰⁾、偽ニュッサのグレゴリオスはユダヤ人をそれぞれ論駁相手としている。

しかし、引用している著者や文献について確認するだけでは、実際にどのような文脈の中で詩 32:6 が引用されたかが分からない。特に、上述した 2 点目と 3 点目の指摘については、本文に当たってみなければ推測の域を出ないままになってしまう。以下では本文を確認していき、詩 32:6 が「教父」たちにどのような目的で引用されているのかをより具体的に明らかにしていく。

2. 「教父」における詩篇 32 篇 6 節 (LXX) 引用の用例

2.1. 最初の用法

神の三性 (τριάς) を最初に説いたことで知られるアンティオキアのテオフィロスは、詩 32:6 を引用したことで最初の人物であった。彼の詩 32:6 の用法で独特なの

(18) TLG による検索結果では、アタナシオス 10 回（偽書も含むと 18 回）、ディデュモス 13 回、バシレイオス 7 回（偽書も含むと 11 回）の引用箇所を確認できた。アンブロシウスは *Biblia Patristica* で 24 回の引用箇所を数え、その内 10 回が『聖霊論 (*De spiritu sancto*)』となっている。

(19) ギリシア語で Πνευματομάχοι は「霊に戦いを挑む者」という意味である。

(20) 『マケドニオス派との論争 (*Dialogi duo contra Macedonianos*)』はアタナシオスの名前で伝わっている。しかし、聖霊の神性を否定する者たちがマケドニオス派という名前で呼ばれるのは 380 年以降であり、アタナシオスの生きた年代 (373 年没) にはこのような呼称はまだなかったと考えられている。このことからこの文書が偽書であることは明らかであるだろう [小高毅「四世紀後半における聖霊論—ディデュモス『聖霊論』を中心に—」『日本の神学』(32 号、日本基督教会、1993 年、24-44 頁) 28 頁参照]。

は、「息吹=霊」を知恵と同一視したことである⁽²¹⁾。そして、彼の考える神の三性とは神と言葉と知恵の3つであった⁽²²⁾。また、同時代のエイレナイオスも同様の解釈をしており、詩32:6の「霊」を神の知恵であると理解した⁽²³⁾。知恵はキリスト教の伝統において「言葉」と共に子と同一とされていくが⁽²⁴⁾、詩32:6を最初に引用した2人の護教家にとってこの聖書箇所は、「霊」と知恵とが一致していることを示すものだったのである。

2.2. ロゴス・キリスト論

ローマ帝国初頭パレスチナの地で生きたイエスをロゴスという普遍的な真理と同一のものだと主張するロゴス・キリスト論 (Logos-Christology) は、ユスティノスによって2世紀中頃に展開され、以降の古代のキリスト論に大きな影響を与えた⁽²⁵⁾。

詩32:6は、ロゴス・キリスト論の強力な立証テキストであるヨハネ福音書の冒頭「ロゴス賛歌」(1:1-18)と頻繁に対応させられる。そのような用例は、時代的にも地理的にも多岐に渡っており⁽²⁶⁾、いかにこの論法が普及していたのかを物語っている。そして、この「ロゴス讃歌」と共に引用される際には、「主の言葉によって天は造られた」(τὸ ῥῆμα τοῦ κυρίου οἱ οὐρανοὶ ἐστερεώθησαν) という前半部に重点が置かれ、前半部だけが引用されることさえある。そのような場合、議論は「言葉」に関して集中して行われており、ロゴス・キリスト論を証明するための根拠としての用例であることは、ほとんど疑う余地はない。そのような用例は、ヒッポリュトスやオリゲネス、エウセビオス、マルケロス、アタナシオス、『アタナシオスとザーカイの対話 (*Dialogus Athanasio cum Zakchaio*)』などに見つけることができる⁽²⁷⁾。

ここで興味深いのは、オリゲネスとエウセビオス、マルケロス、アタナシオスの4人が詩32:6の前半部を「彼は言葉を遣わして、彼らを癒し、彼らを墮落させるものから救った」⁽²⁸⁾ という詩篇106篇20節 (LXX)⁽²⁹⁾ と組み合わせて引用している点である。これは、オリゲネスに倣って他の3人が引用したか、彼らがロゴス・キリスト論についての共通の証言集 (*Testimonia*)⁽³⁰⁾ を有していたかのどちらかと考えられるだ

(21) Theophilus. *Autol.* 1.7.

(22) Ibid. 2.15.

(23) Irenaeus. *Hear.* 3.24.2, *Dem.* 5.

(24) Tertullianus. *Prax.* 7.3, Ps-Gregorius Nyssenus. *Test.* 1.1.1, Ps-Athanasius. *Dial.* AZ. 7.

(25) 水垣渉「第一章 新約からニカイア公会議まで」水垣渉・小高毅編『キリスト論論争史』(日本キリスト教団出版局、2003年、45-112頁) 69-74頁参照。

(26) Theophilus. *Autol.* 1.7, Irenaeus. *Dem.* 5, Cyprianus. *Test.* 2.3, Athanasius. *Ep. Serap.* 2.8, Ps-Epiphanius. *Test.* 3.2.

(27) Hippolytus. *Noe.* 12.4, Origenes. *Frag. Joan.* 1, Eusebius. *Dem. ev.* 5.6.6, *Mar.* 2.2.9, 2.4.26, *Ecc. theo.* 2.24.1, Marcellus. *Frag.* 47, Athanasius. *Ep. Serap.* 2.8, Ps-Athanasius. *Dial.* AZ. 8.

(28) ἀπέστειλεν τὸν λόγον αὐτοῦ καὶ ἴασατο αὐτοὺς καὶ ἐρρύσατο αὐτοὺς ἐκ τῶν διαφθορῶν αὐτῶν.

(29) 新共同訳聖書では107編20節にあたる。

(30) 新約聖書を含む古代のキリスト教の著作家が、典礼や論争の場で用いるための立証テキストを一覧表にしていたとする「証言集」仮説 (*Testimonia Hypothesis*) による。この仮説は、J.R. Harris 著

ろう。しかし、オリゲネス主義者のエウセビオスがオリゲネスに倣うのは納得できるが、オリゲネス主義者と敵対したニカイア派右翼のマルケロスが彼に倣ったというのは、流石に考えづらい。さらに、248 年頃にキュプリアヌスに書かれた現存する最古の証言集成『クィリヌスへ宛てた証言集 (*Testimoniorum libri tres ad Quirinum*)』において、詩 32:6 と 120 篇 20 節は、ヨハネ福音書冒頭を足した 3 つの証言で一つの見出し「キリストが神の言葉と同じであること」⁽³¹⁾ に既にまとめられているので、共通の証言集を有していたという方が蓋然性は高いだろう。このことを考慮すると、ロゴス・キリストを証明するために詩 32:6 の前半部は詩篇 106 篇 20 節と揃えて提示される聖書箇所としてかなり普及していたと言える。

2.3. 三位一体論の形成期

続いて、詩 32:6 の前半部だけを引用した 3 世紀前半のヒッポリュトスの例を確認してみよう。本文は以下の通りである。

実に、祝されたヨハネも、預言者たちを通して言われたことを要約し、それを通して万物が成った言葉が彼であることを明らかにしている。実際こう言っている、「初めに言葉があった。言葉は神と共にあった。言葉は神であった。万物は言葉を通して成った。言葉によらず成ったものは何一つなかった」(ヨハ 1:1-3)。
[中略]したがって、「主の言葉によって天は造られた」と預言者が言うように、世界は言葉を通して成ったと彼が言うとするれば、当然、明らかにされたのもこの言葉である。したがって、われわれが観るのは「受肉した言葉」であり、これを通してわれわれは父を認識し、子信じ、聖霊を礼拝するのである。

『ノエトス駁論 (*Contra Noetum*)』12.3-4⁽³²⁾

ここで、キリストも父だと捉えて父の存在だけを認める様態論者のノエトスに対して (*Noe.2.3*)、父と子と聖霊の三者の存在をヒッポリュトスは示そうとしている。ま

↘ [*Testimonies*. 2 vols. (Cambridge; Cambridge university Press, 1916-1920)] や新約聖書学者の C.H. Dodd [*According to the Scripture: The Sub-Structure of New Testament Theology* (London; Nisbet, 1952)] らによって確立された。

(31) “QVOD CHRISTVS IDEM SIT SERMO DEI” [R. Weber, *Ad Quirinum* (Corpus Christianorum Series Latina 3/1: Turnhout; Brepols, 1972, 1-179)].

(32) ἀνακεφαλαιοῦται γὰρ ὁ μακάριος Ἰωάννης τὰ διὰ τῶν προφητῶν εἰρημένα δεικνύς τοῦτον εἶναι τὸν Λόγον δι' οὗ τὰ πάντα ἐγένετο. φησὶν γὰρ οὕτως, Ἐν ἀρχῇ ἦν ὁ Λόγος καὶ ὁ Λόγος ἦν πρὸς τὸν Θεὸν καὶ Θεὸς ἦν ὁ Λόγος ἦν πρὸς τὸν Θεόν. πάντα δι' αὐτοῦ ἐγένετο καὶ χωρὶς αὐτοῦ ἐγένετο οὐδὲ ἓν. — εἰ οὖν ἔφη, Ὁ κόσμος δι' αὐτοῦ γεγένηται, καθὼς λέγει ὁ προφήτης, Τῷ Λόγῳ Κυρίου οἱ οὐρανοὶ ἐστερεώθησαν, ἄρα οὗτός ἐστιν ὁ Λόγος ὁ καὶ ἐμφανῆς δεικνύμενος. οὐκοῦν ἑνσαρκον Λόγον θεωροῦμεν; Πατέρα δι' αὐτοῦ νοοῦμεν, Υἱὸν δὲ πιστεύομεν, πνεύματι ἁγίῳ προσκυνοῦμεν.

[R. Butterworth, *Hippolytus of Rome. Contra Noetum* (London; University of London Heythrop College, 1977, 43-93)]. 本引用は小高毅訳 [上智大学中世思想研究所編『中世思想原典集成 1—初期ギリシア教父—』(平凡社、1995 年、467-494 頁)] に筆者が一部変更を加えたもの。

た、彼は「受肉した言葉 (ἐνσαρκον Λόγον)」というロゴス・キリスト論の用語を用いており、子を普遍的な存在だと考えている。詩 32:6 の前半部は、このような場面において用いられており、その議論もやはり「言葉」に関して集中していると言える。確かに、引用部の最後では父と子と聖霊の三者について述べられているが、彼が本当に聖霊を重視するのならば、「息吹=霊 (Πνεύμα)」について扱う詩 32:6 の後半部を削らずに引用して言及するのが自然であるし、何より「聖霊を礼拝する」の文言は文脈からして唐突に語られている印象を受ける。

実際のところ、ヒッポリュトスの神論は三位一体論の概念成立の過渡期に位置付けられている。彼は、聖霊を「経綸 (οἰκονομία)」⁽³³⁾ として第三のものとして考えたが、父と子の二つの位格 (プロソーポン = πρόσωπον, persona) を主張し (Noe.14.2-3)、聖霊を知性と意志とを備えた第三位格とは捉えなかったのである。

聖霊を第三位格として含んだ「三位一体 (trinitas)」は、ヒッポリュトスより少し前の年代に同様の異端と戦ったテルトゥリアヌスによって練り上げられている⁽³⁴⁾。しかし、彼の三位一体論も各位格を同等な関係としていない不十分なものであった。彼の詩 32:6 の引用は、3箇所計4回数えることができ⁽³⁵⁾、3箇所ともテキスト全体が引用されている。しかし、テルトゥリアヌスにおいても詩 32:6 は「ロゴス讃歌」と合わせて「言葉」が第二の位格であったということを示すに留まっており、まだ第三位格の聖霊に関する立証テキストとしては用いられてはいない。

2.4. オリゲネス

詩 32:6 の後半部の「息吹=霊」にも重点を置いた議論が比較的早く行われた例として、アレクサンドリア学派のオリゲネスの名を挙げるができる。オリゲネスは父と子と聖霊が三つの位格 (ヒュポスタシス = ὑπόστασις) であると捉え⁽³⁶⁾、テルトゥリアヌスよりも各位格の独立性を強調した三一論を展開した⁽³⁷⁾。

彼は 230 年頃に『原理論 (De principiis)』を著しており、その中で聖霊論を第 1 巻 3 章と第 2 巻 7 章の主題として扱っている。詩 32:6 は、前者の第 1 巻 3 章の 7 節において、三位のうちに優越がないことを示す意図で引用される。それは、「聖霊の業が聖者たちにだけ与えられるのに対して、父と子の業が万人に及ぶ」とオリゲネス自身が論じたことによる誤解を受けなかったためであった。そして、この立証テキストから

(33) 神の計画や神の隠れたる目的を意味する語であり、初代教会の中でこの語を用いたのはエイレナイオス (Dem.47) である [cf. J.D.N. Kelly, *Early Christian doctrines* (London; Continuum, 1977, 5th rev ed.), pp.104-105 and p.110].

(34) Tertullianus.Prax.3, 11, 12.

(35) Tertullianus.Herm.45.2, Prax.7.3, 19.3, 19.5.

(36) Origenes.Com.Joan.2.10.75.

(37) J.D.N. Kelly, *Early Christian doctrines*, p.129.

三位にはそれぞれの位格にしかない固有の役割があるのだと彼は論じた。

しかしながら、聖霊の業を聖別された者たちに限定したオリゲネスの考えは、結局のところ父が聖霊を超えているという理解に立っていると評される⁽³⁸⁾。なぜなら、父だけが「まことの神 (αὐτόθεος)」⁽³⁹⁾ だとする従属説的な見解をオリゲネスが有していたからである⁽⁴⁰⁾。

それでも、オリゲネスが聖霊を含んだ三位一体の根拠として詩 32:6 を引用したことは (*Princ.*4.4.3 でも同様の用例)、この聖書箇所解釈史においてロゴス・キリスト論的な理解から次の段階へと一歩進ませたという点で、非常に意義のあるものだと言えるだろう。

とはいえ、オリゲネスの用例以降すぐに、子の位格についてだけでなく聖霊の位格をも表す立証テキストとして詩 32:6 が用いられるようになったわけではなかった。3 世紀後半から 4 世紀前半までの詩 32:6 の引用で、「霊」について注解した用例があまり見あたらないのである。例えば、この時代に活躍したエウセビオスは詩 32:6 を 9 箇所まで計 11 回引用しているが⁽⁴¹⁾、そのほとんどが「言葉」に関する議論に従事するための立証テキストであり、「霊」に関する言及は「誰一人として霊の臨在なしには聖別されない」⁽⁴²⁾ と聖霊の役割の重要性な述べた 1 箇所だけに留まっている。また、エウセビオスと同時代のラクタンティウスにおいても、詩 32:6 の引用は 1 回だけで、2 世紀後半以来のロゴス・キリスト論的な解釈がなされている⁽⁴³⁾。つまり、4 世紀前半の段階において、詩 32:6 は聖霊の位格を主張するための立証テキストとしてあまり用いられておらず、あくまで「言葉」に関する議論で用いられ続けていたのである。

2.5. 四世紀後半の聖霊論

4 世紀の後半になり、事態は変わる。325 年のニカイア公会議以降もニカイア派 (父と子を「同本質 (ὁμοούσιος)」とするホモウシオス派) と激しい論争を続けていたアレイオス派の中で混乱が生じたのである。350 年頃、父と子の本質 (οὐσία) が異なるどころか似てさえいないとする急進的なアレイオス派左翼の非相似派が登場する

(38) Ibid. p.132.

(39) Origenes.*Com.Joan.*2.2.17, 2.3.20.

(40) オリゲネスの従属説的な見解を異端として見なしたのは、エピファニオスやヒエロニムスであり (Epiphanius.*Pan.*64, Hieronymus.*Adv.Ruf.*2.12-13)、553 年の第二回コンスタンティノーブル公会議においてユスティニアヌス帝は彼を異端の旨で破門した。

(41) Eusebius.*Pr.ev.*7.12.4, 11.14.5, 11.30.3, *Dem.ev.*5.5.1, 5.5.2, 5.6.6, *Mar.*2.2.9, 2.4.26, *Ecc.theo.*2.24.1, *Com.Ps.* PG23:281 (two times).

(42) Οὐδὲν γὰρ ἀγιάζεται μὴ τῆ παρουσίας τοῦ Πνεύματος. [J.P. Migne, *Commentaria in Psalmos* (PG 23-24: Paris; 1857-1866, 23:66-1396 et 24:9-76) 23:281].

(43) Lactantius.*Inst.*4.8.14.

と、非相似派の過激な主張に対する反動として、父と子の「類似した本質 (ὁμοιούσιος)」を説いたニカイア派にほとんど近いホモイウシオス派が、356年頃までに形成されていった。このような動きから、アタナシオスなどのホモイウシオス派は、ホモイウシオス派との和解を呼びかけていく⁽⁴⁴⁾。その和解活動の結果、ホモイウシオス派の中でホモイウシオス派と合流した者と決別した者が出ることとなった。この決別した者たちは、エピファニオスによって「半アレイオス派 (Ἡμιαρείοι)」と呼ばれる異端とみなされたが⁽⁴⁵⁾、その決別の理由は、彼らが聖霊の神性を認めようとしなかったからであった。聖霊の神性を否定する考えは、アレイオス派と共通するものであり、聖霊を神と子との下に数えられると説くアレイオス派左翼の非相似派もその例外ではなかった⁽⁴⁶⁾。こうしてもともと反目し合っていたホモイウシオス派と非相似派の両者は聖霊否定論という点では一致することとなった。

このような神論の論争点が生じた格から聖霊の位格へと移り変わる状況の中で、聖霊の神性を主張するホモイウシオス派のアタナシオスやカッパドキア三教父のバシレイオス⁽⁴⁷⁾は、聖霊論を扱った著作を残した。アタナシオスとバシレイオスの両者は、詩 32:6 をこれらの著作の中で頻繁に引用している。アタナシオスが聖霊論を主題に扱った著作は、356年から362年に書かれた4つの手紙からなる聖霊否定論者を論駁する『セラピオンへの手紙 (Epistulae ad Serapionem)』であり、この著作において彼は詩 32:6 を4回引用している⁽⁴⁸⁾。このことは、彼の前期の主著でロゴス・キリスト論を扱った『異教徒反駁 (Contra Gentes)』と『言の受肉 (De Incarnatione)』において両著作を合わせても1回しかないことと対比できるだろう⁽⁴⁹⁾。また、バシレイオスにおいても『エウノミオス反駁 (Adversus Eunomium)』の第3巻「聖霊論」や『聖霊論 (De spiritu sancto)』といった聖霊に関する議論をする著作において、詩 32:6 を好んで引用しているのを確認できる⁽⁵⁰⁾。

アタナシオスの詩 32:6 の用法について確認すると、『セラピオンへの手紙』の4回の用例のうち、「ロゴス讃歌」と詩篇 106 篇 20 節と合わせてロゴス・キリストを証明しようとする伝承的な用法が1回ある以外は (Ep.Serap.2.8)、いずれも子と聖霊の双方を軽視して三位を少なくしてはいけないということを論じる根拠として引用されて

(44) 和解を呼びかけた具体的な著作として『アンティオキア人への通告 (Tomus ad Anichenos)』が挙げられる。

(45) Pan.73.titulus, 74.1.

(46) J.D. Mansi, *Fidei expositio ab Eunomii* (Sacrorum Conciliorum nova et amplissima Collection 31vols: Florence and Venice; 1758-1798, 3:645-650) 3:648.

(47) バシレイオスに関して、彼自身もともとホモイウシオス派であったとされている。彼がこの一派を離れニカイア信条の強力な支持者となるのは後年になってからである [A. メレディス『カッパドキア教父—キリスト教とヘレニズムの遺産—』津田謙治訳 (新教出版社、2011年) 52-53頁]。

(48) Athanasius.Ep.Serap.1.31, 2.8, 3.5, 4.3.

(49) Ibid. Gen.46.

(50) 『第8書簡 (Epistulae 8)』11でも詩 32:6 を用いて聖霊の神性な力についての議論がなされている。

いる。それは、聖霊が父と子より劣っている、または被造物であるという敵対者の主張に反論する立証テキストとして詩 32:6 が用いられるようになったことを示している。

さらに、これらの箇所での詩 32:6 引用において、アタナシオスは聖霊否定論者だけでなく、アレイオス派やサベリオス主義、ユダヤ人など様々な三位一体を否定する敵対者の名を挙げて論駁している。アタナシオスは、詩 32:6 を様々な異端者たちに対して三位一体の“正しい教え”を証明するのに有効な聖書箇所だと考えていたのだろう。また様々な異端に対してこの立証テキストを用いることは、377 年頃にエピファニオスが完成させた『パナリオン (Panarion)』にも見られる。彼はグノーシスのサトルニロス派 (Pan.23) やアレイオス派 (69)、養子論者のフォティヌス派 (71)、プネウマトマコイ (74)、非相似派 (76) に対して詩 32:6 を用いている。

続いてバシレイオスの用例を見ていく。彼は、364 年頃に彼の最大の論敵となった非相似派のエウノミオスに対して『エウノミオス反駁』を著した。詩 32:6 は、ここで重要な役割を持つ立証テキストとなる。それは、非相似派たちがアモス書 4 章 13 節の「神は風 (霊) を創造した」(Ὁ κτίζων πνεῦμα) を「ロゴス讃歌」の「万物は言葉 (それ) によってなった」(πάντα δι' αὐτοῦ ἐγένετο) と並べて、「風=聖霊」が、父や「言葉=子」より劣っていると主張したからである⁽⁵¹⁾。従来、子の位格を表す強力な立証テキストであった「ロゴス讃歌」を非相似派の人々は、アモス書と併せて引用して、聖霊の神性の否定を示すために用いたのである。バシレイオスは、それに対して詩 32:6 を提示した⁽⁵²⁾。詩 32:6 は、聖霊が被造物ではなく、「霊」も創造の際に働いていたことを示す証拠とするのにふさわしい聖書箇所であったのである。このように、非相似派の主張に対抗する重要な立証テキストとして詩 32:6 はバシレイオスに用いられた。

もう一つバシレイオスの用例を確認しておこう。『聖霊論』は、かつての盟友で聖霊否定論者となったエウスタティオスを論駁する目的で 375 年頃に書かれた。そして、詩 32:6 は聖霊が創造において完成の原因であるとする文脈で引用される。そして、詩 32:6 の「言葉」と「息吹」とを、人間的に捉えるのではなく、「言葉ははじめに神とともにあって、神でさえあった言葉であり (ヨハ 1:1)、霊は神の口からのもので、〈父から発出する真理の霊〉 (ヨハ 15:26) である」(Λόγος μὲν ὁ πρὸς Θεὸν ὢν ἐν ἀρχῇ, καὶ Θεὸς ὢν Πνεῦμα δὲ στόματος Θεοῦ, «τὸ Πνεῦμα τῆς ἀληθείας, ὃ παρὰ τοῦ Πατρὸς ἐκπορεύεται») ⁽⁵³⁾ と神的に捉えるようにバシレイオスは主張している。このバシレイオスの神の「言葉」や「息吹」を人間的に捉えないようにする理解は、他の「教父」

(51) Basilius.Eun.3.7[J.P. Migne, (PG 29, Paris; 1857-1866, 497-669)668-669].

(52) Ibid.3.4.

(53) Basilius.Spirit.38 [B.Pruce, *Sur le Saint-Esprit* (Sources chrétiennes 17: Paris; Cerf, 1968)].

においても見つけることができ、それはテルトゥリアヌスが様態論者を批判して以来の解釈であった⁽⁵⁴⁾。この伝統的な解釈は三つの位格と一つの本質を表すのに普及した理解だったことは、400年頃に三位一体を説く正統派の「教父」が、バシレイオスの本文をほとんどそのまま写していることから明らかである⁽⁵⁵⁾。

まとめ

「教父」における詩篇32篇6節(LXX)引用は、神の他の位格の存在を示す立証テキストとして2世紀の末から伝統的になされていた。ただし、2世紀末から4世紀前半の用法では、「言葉=子」について述べる詩32:6の前半部に重点を置いた用例が目立ち、「息吹=聖霊」について述べる後半部を省略してしまう場合も少なくなかった。これは、4世紀の前半までの「教父」たちが、詩32:6を三位一体というよりもむしろロゴス・キリストを証明する目的で引用していたからであるだろう。しかし、神の第三位格として「息吹=聖霊」を捉える動きは、3世紀の初頭には成立していたのである。そのような中で、3世紀中葉のオリゲネスは、詩32:6の後半部「息吹=聖霊」にも重点を置いた三一論的な用法を初めてしたが、彼以降の「教父」たちの間でその用法がすぐに浸透していったわけではなかった。つまりそれは、彼らの論敵との争点がキリスト論だったことを示している。4世紀の後半を迎えると、詩32:6は三一論の中でも特に聖霊論を扱う立証テキストとして頻繁に引用されるようになる。それは、聖霊の神性を否定する者たちが現れ、三一論の争点がキリスト論から聖霊論に転じたからである。そして、聖霊論を含む三一論の論争が盛んだった4世紀の後半に、詩32:6の引用回数はピークを迎えている。

この詩32:6の用法の歴史は、325年のニカイア信条と381年のニカイア・コンスタンティノーブル信条での発展と並行していると言える。前者の信条では三位一体こそ教義としているが、聖霊は「我々は聖霊を信ず」と簡潔に書かれているだけである。対して後者では、聖霊は父と子と同等に語られている。詩32:6の用法においても、4世紀前半までは、聖霊を含む三位一体の用例こそあったにせよ、それはあまり普及していなかった。しかし、4世紀の後半になると詩32:6は聖霊論の文脈において主に用いられるようになった。

以上のことから、詩篇32篇6節(LXX)の立証テキストとしての用法の推移は、三位一体論の形成史と一致していると結論付けることができるのである。

(54) Tertullianus. *Prax.* 7.3-6, Eusebius. *Dem. ev.* 5.5, Gregorius Nyssenus. *Or. catech.* 4.1-2.

(55) Ps-Gregorius Nyssenus. *Test.* 1.1.